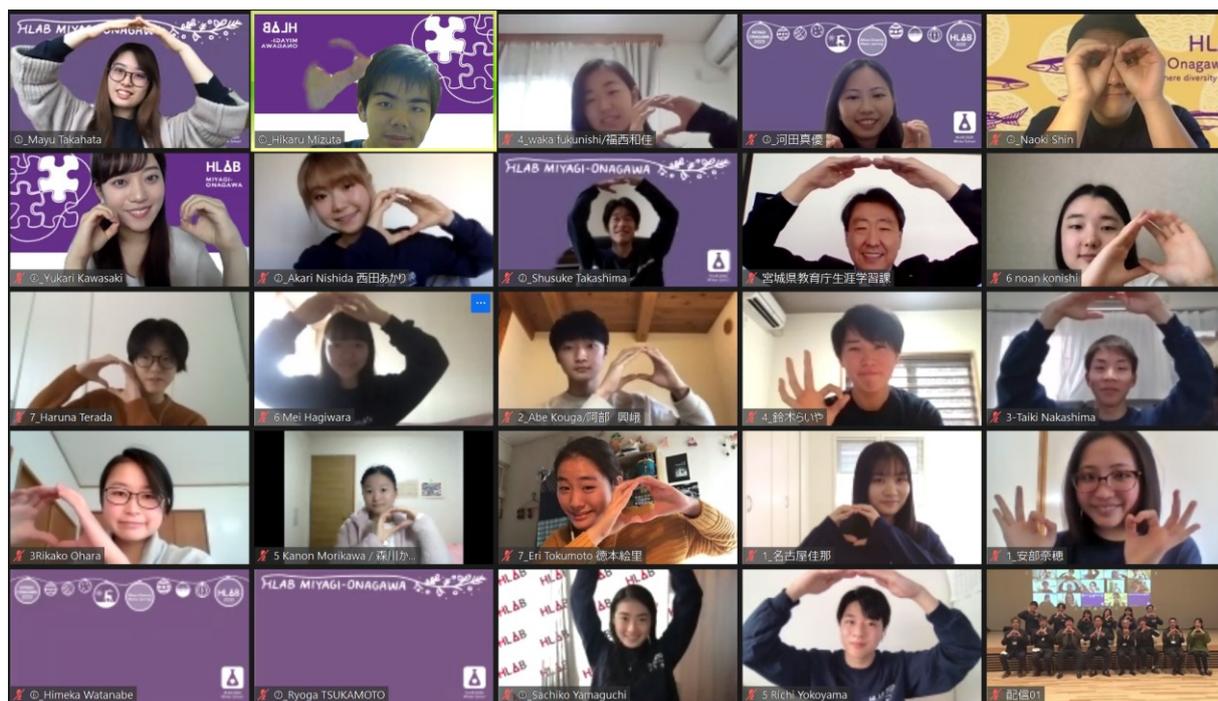


# 2020 年度宮城県青少年国際交流推進事業

## 「ウィンタースクール宮城・女川」 成果報告書



令和3年3月  
宮城県教育委員会

# 1 趣旨

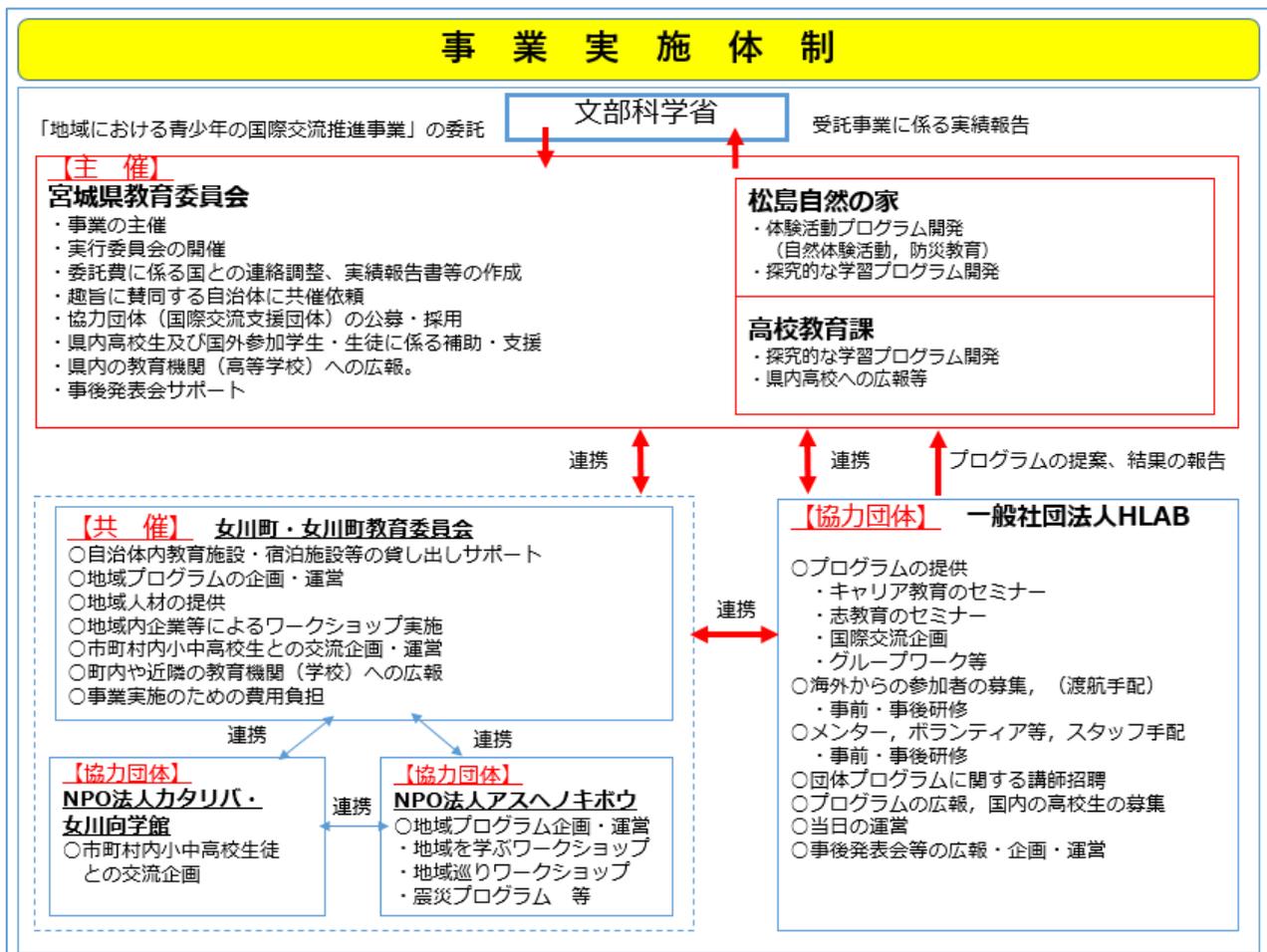
- 宮城県内外の高校生等に、「国境も言語も世代も超えた多様な出会い」を通じて、社会性や労働観を養い、自己を見つめ直し将来を真剣に考える機会を提供するとともにその成果を普及することで、みやぎの志教育を推進する。また同時に、外国語に親しみ、外国語への意欲と語学力の向上を図る。
- これからの復興を担う県内外の高校生・大学生が、海外の大学生に、現在の復旧・復興の様子を伝えるとともに、今後の復興についてディスカッションすることを通して、将来の宮城のあり方について考える契機とする。また、本事業を通じて国内外に宮城の復興の様子をアピールする。

# 2 事業実施体制

## (1) 実施体制

- ◎主催 宮城県教育委員会
- 共催 女川町、女川町教育委員会
- 協力 特定非営利活動法人 アスヘノキボウ  
認定特定非営利活動法人 カタリバ・女川向学館  
一般社団法人 HLAB

【事業実施体制図】



## (2) 主催・共催・協力団体の役割

本事業は、「女川町」及び「女川町教育委員会」と共催するとともに、国際交流推進に係る各種

プログラムを有する「一般社団法人 HLAB」（以下「HLAB」）と連携して事業を実施した。また、女川町における企画内容の構築や全体のプロジェクト運営におけるサポート役として「特定非営利活動法人アスヘノキボウ」（以下「アスヘノキボウ」）、及び女川町中高生との交流企画運営役として「認定特定非営利活動法人カタリバ・女川向学館」（以下「女川向学館」）も協力団体として加わった。上記4団体と県教委とで実行委員会を組織し、適宜情報共有をしながら、それぞれの役割を明確化した上で、事業を推進した。

なお、宮城県教育委員会として、高校教育課並びに松島自然の家も実行委員会に参画し、自然体験活動及び防災教育、探究的な学びの観点からのプログラム開発、県内高校への広報等に携わった。

#### ①宮城県教育委員会

- 本事業を主催し、全体の取組の企画運営に責任を持つ。また、事業実施に必要な協力主体を巻き込み、企画の進捗管理を行った。
- 県内高等学校に、本事業に関する事前の広報活動を行った。
- 本事業終了後、主に参加者の通学する各高校で報告会を実施し、活動の認知度を広めた。

#### ②女川町及び女川町教育委員会

- 本事業開催に際して、町の所有施設を開催場所として提供した。（女川町生涯学習センター等）
- 震災からの復興・復旧を目指す人々や地元企業に働きかけ、各種プログラムにその人材を提供した。
- 町内においては、町報での告知等、町内全域に情報が行き渡るよう積極的に広報活動を推進した。

#### ③HLAB

- 本事業の実施に向けて、海外大学生や通訳可能な英語力を有する国内大学生をメンターとして組織化し、派遣した。
- 本事業の主たる企画及び運営を担った。

#### ④アスヘノキボウ

- 女川町の人材や地元企業に働きかけて、地元の商店街や地元企業でのワークショップ等を企画した。
- 期間中のプログラム遂行においてアドバイスやサポートを必要に応じて行った。

#### ⑤女川向学館

- 女川町の高校生への広報、探究的な学習プログラムについての助言等を行った。

### 3 事業実施期間 文部科学省委託契約締結時から令和3年3月5日まで

### 4 年間スケジュール

- 2020年 9月18日：第1回実行委員会 (オンライン)
- 10月14日：第2回実行委員会 (オンライン)
- 11月21日～22日：メンター事前研修合宿 (女川町)
- 12月 9日：第3回実行委員会 (オンライン)
- 12月25日：前日準備、メンター事前研修 (女川町)
- 12月26日～29日：ウィンタースクール宮城・女川開催 (女川町)
- 12月30日：メンター事後研修 (女川町)

## 5 「ウィンタースクール宮城・女川」の実際

## ○1日目 12月26日(土)

10:30-11:30 開会式,オリエンテーション

〔生涯学習センターホール〕

- ・挨拶 宮城県教育庁生涯学習課長 嘉藤 俊雄  
HLAB 実行委員長 谷吉 農
- ・祝辞 女川町長 須田 善明様  
女川町教育委員会教育長 村上 善司様

11:30-12:30 アイスブレイク

12:30-13:00 大学生・スタッフ等自己紹介

14:00-15:30 女川ツアー)

16:00-18:30 Discover Onagawa

20:00-22:00 リフレクション・意見交流

## 【開会式】

参観者をオンラインでつなぎ、画面を通じて生涯学習課長 嘉藤俊雄による主催者挨拶、実行委員長 谷吉農の挨拶で「ウィンタースクール宮城・女川」がスタートしました。開催地女川町からは町長 須田善明様、女川町教育委員会教育長 村上善司様にご出席いただき、高校生や大学生に向けて、本事業を通して多くの学びを得られることへの期待など、温かいお言葉をいただきました。



上：委員長挨拶，下：オンライン開会式の様子

## 【女川ツアー・Discover Onagawa】

1日目は「地域について知る・考える」というテーマのもと、被災地女川の復興の歩み等を参加者が肌で感じることができることを目的にしたプログラムを実施しました。

女川ツアーでは、女川駅前～駅前商店街「シーパルピア女川」をオンライン中継し、現地に来ることができなかった参加者が、少しでも女川町を感じることができるようになりました。

Discover Onagawaは震災を契機に、地元でスペインタイル工房を立ち上げた方を講師に迎え、震災からの復興の歩みについてお話しいただきました。また、作成キットを参加者に送ることで、通常店舗で行っているスペインタイルづくりワークショップをオンラインを通じて実施しました。同じ体験を同時進行で行うことで、一緒に活動しているような感覚を得ることができました。



上：女川駅前商店街からのオンライン中継

下：オンライン中継を見ながらのスペインタイルづくりと実際に完成したスペインタイル

## ○2日目 12月27日(日)

08:30-09:00 チャレンジタイム

09:00-09:30 オンライン入室

10:00-11:00 セミナー

11:00-13:00 大学生フリーインタラクシオン

14:00-15:30 自己分析ワークショップ

16:00-18:30 社会人フリーインタラクシオン

20:00-22:00 リフレクション・意見交流

2日目は「いろいろな立場の方との交流を通じて様々な刺激を得る」ことをテーマにしたプログラムを実施しました。

### 【チャレンジタイム】

参加者が普段取り組みたいと思いながら取り組めていないことに挑戦するプログラム。ハウス（ウィンタースクール中に一緒にプログラムを行うグループ）の仲間と取組結果や経過等についてオンライン入室後に仲間と共有することで、次への意欲につながる事ができました。

### 【セミナー】

海外大学生と日本人の大学生がメンターとして大学での学びについて英語でディスカッションするプログラム。多様なテーマの中から高校生は自分の関心に合わせて3日間自由に体験することができました。高校生にとって、新しい興味分野を発見する機会となりました。

### 【大学生フリーインタラクシオン】

高校生が普段感じている課題や進学等に関する悩みなどについて、ハウスの仲間や大学生メンターと自由にディスカッションするプログラム。自由な話し合い、大学生メンターによるアドバイスを通して、高校生は前向きに考えることができていました。

### 【自己分析ワークショップ】

高校生参加者が、大事にしたいことや価値を感じていることは何か、今後どのようなアクションを起こしたいのか等について、ハウスの仲間や大学生メンターとの対話を通して、自分自身について考えるプログラム。対話をするうちに自分が本当に大事にしたいことや、今後取り組みたいことを明確にするきっかけを得ることができました。

## 【社会人フリーインタラクシオン】

全国的に、第一線で活躍している社会人の方々から、それぞれのキャリアについて話してもらうとともに、高校生、大学生、社会人が世代を超えて本音で語り合うプログラム。様々な業界で働く社会人の方々と交流できる機会は、高校生にとって自分たちの将来について考えるきっかけとなり、「人生の先輩方」から進路選択や自己理解に関して多くのアドバイスをいただき、宮城の「志教育」に直結した活動となりました。

## ○3日目 12月28日(月)

08:30-09:00 チャレンジタイム

09:00-09:30 オンライン入室

10:00-11:00 セミナー

11:00-13:00 フォーラム

14:00-15:30 P&P

16:00-18:30 スタートアップワークショップ

20:00-22:00 リフレクション・意見交流

3日目は、これまでのプログラム等を通して得られた学びをもとに、「これからを考える」ことをテーマにしたプログラムを実施しました。

### 【フォーラム】

社会人として活躍されている方による講演とパネルディスカッションで構成されるプログラム。かまぼこ工場を運営しながら、復興に向けて地元女川をどのように元気にしていくかを考え、イベント等を誘致した実績のある高橋氏から高校生に向けて地域で生きる意味やアクションの起こし方について熱いメッセージをいただきました。



高橋氏の講話(右)とオンライン参加の様子(左)

## 【P&P】

これまで自分を見つめたり、様々な人との交流をしたりしたことを通して考えたことをお互いに共有するプログラム。ペン (Pen) と紙 (Paper) を使い、書き出しながらお互いに大事にしていることを可視化することで、自分が価値を置いていることが何か再確認することができました。

## 【スタートアップワークショップ】

ウィンタースクールの各プログラムを通して、自分を見つめ直したことを踏まえ、これからの高校生生活やその後において実行したいこと(アクション)を考えるプログラム。今回のウィンタースクールが新たなスタートのきっかけとできるよう、仲間と共有しました。

## ○4日目 12月29日(火)

08:30-09:00 チャレンジタイム

09:00-09:30 オンライン入室

10:00-11:00 セミナー

11:00-13:00 振り返り企画

14:00-15:30 閉会式(出発式)

最終日となる4日目は、これまでの学びを振り返りながら、「新たなスタートを切る」ことがテーマに、未来の自分を考える1日となりました。

## 【振り返り企画】

これまで3日間の多くの時間を(オンラインながらも)一緒に過ごしてきたハウスの仲間と過ごす最後のプログラムであり、この4日間の学びを改めて振り返る企画。「4日前は緊張であり話すこともできなかった自分が積極的に仲間と交流できた。」

「志の高い社会人から生き方を考えるヒントをもらった。」など、自分自身の成長を味わう一時となりました。

## 【閉会式(出発式)】

ウィンタースクールの終わりであると同時に、参加者一人一人の新たなスタートの意味をもつことから閉会式=出発式と命名した最終プログラム。一堂に会しての成果発表会はできませんでしたが、参加者一人一人が自分自身の変化・成長を発表するとともに、今後の抱負を堂々と宣言することができました。



4日間の学びを共有した出発式のオンライン画面

## 6 成果報告会

### ○参加者独自の成果発表

新型コロナウイルス感染対策として、対面での成果発表会は行わず、参加者が在籍する学校等において発表することとした。(学校によってはオンラインによる自宅学習のみの場合もあり、身近な家族や友人への発表に留まる場合もあった。)

#### <発表方法>

- ・教室での成果発表(8人)
- ・作成したレポートによる発表(廊下への掲示, 学校通信への掲載, 友人への回覧)(4人)
- ・家族や友人への報告(オンライン発表を含む)(3人)

参加者独自の発表会における報告は、延べ3,655人に対して行われ、一人当たりの平均人数は243.7人であった。

## 7 成果と課題

### (1) アンケート調査結果

アンケート調査を本事業実施前と実施後に行い、参加者の意識の変容について調査した。調査結果は以下の通りとなった。

| 質問項目                        | 回答平均値 |      | 変容  | 質問項目                       | 回答平均値 |      | 変容  |
|-----------------------------|-------|------|-----|----------------------------|-------|------|-----|
|                             | 事前    | 事後   |     |                            | 事前    | 事後   |     |
| 1 英語で自己紹介ができる               | 3.47  | 3.73 | ↑↑  | 16 その場にふさわしい行動ができる         | 3.33  | 3.53 | ↑↑  |
| 2 外国の人に話しかけることができる          | 3.33  | 3.67 | ↑↑  | 17 自分勝手なわがままを言わない          | 3.13  | 3.47 | ↑↑  |
| 3 将来外国の学校に行きたい              | 2.80  | 3.07 | ↑↑  | 18 嫌がらずによく働く               | 3.07  | 3.27 | ↑↑  |
| 4 将来外国の会社で働きたい              | 2.80  | 3.20 | ↑↑↑ | 19 自分に割り当てられた仕事はしっかりとやる    | 3.67  | 3.67 | —   |
| 5 誰にでも話しかけることができる           | 2.87  | 3.47 | ↑↑↑ | 20 自分がすべき役割をはっきりわかっている     | 3.27  | 3.40 | ↑   |
| 6 人の話をきちんと聞くことができる          | 3.40  | 3.53 | ↑   | 21 交流国の文化(日常生活等)を理解している    | 2.87  | 3.40 | ↑↑↑ |
| 7 人のために何かをするのが好きだ           | 3.53  | 3.47 | ↓   | 22 交流国の歴史を理解している           | 2.40  | 2.93 | ↑↑↑ |
| 8 人の心の痛みがわかる                | 2.93  | 3.07 | ↑   | 23 初めての環境に自分からなじもうと努力する    | 3.33  | 3.53 | ↑↑  |
| 9 自分から進んで何でもやる              | 3.00  | 3.07 | ↑   | 24 日本の文化(日常生活等)を説明することができる | 3.00  | 3.27 | ↑↑  |
| 10 前向きに物事を考えられる             | 2.80  | 3.20 | ↑↑  | 25 日本の歴史を説明することができる        | 2.33  | 2.60 | ↑↑  |
| 11 先を見通して自分で計画が立てられる        | 2.27  | 3.13 | ↑↑↑ | 26 日本人としての良さを説明できる         | 3.20  | 3.20 | —   |
| 12 小さな失敗を恐れない               | 2.67  | 3.07 | ↑↑  | 27 日本人として世界に貢献したい          | 3.47  | 3.27 | ↓↓  |
| 13 うまくいくようにいろいろな工夫をすることができる | 3.00  | 3.20 | ↑↑  | 28 外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい | 3.73  | 3.67 | ↓   |
| 14 新しいことに挑戦したい              | 3.67  | 3.80 | ↑   | 29 交流した外国の人と将来も繋がりをもちたい    | 3.73  | 3.87 | ↑   |
| 15 誰とでも仲よくできる               | 3.00  | 3.33 | ↑↑  |                            |       |      |     |

#### 変容の表記について

0.2未満の変容⇒↑または↓  
 0.2以上～0.4未満の変容⇒↑↑または↓↓  
 0.4以上の変容⇒↑↑↑または↓↓↓

※各項目について、とても思う(4点)、思う(3点)、あまり思わない(2点)、思わない(1点)として集計した。

○全般的にどの項目についても向上が見られ、参加高校生が国際交流への意識、地域課題に向き合おうとする意識等、本事業の目的に向かうことができたことがアンケート結果からも伺うことができた。特に①外国人とのコミュニケーションに関する意識、②外国の歴史・文化の理解、③自分の行動への見通し・計画性に関することについての向上が顕著だった。①・②についてはセミナーにおける海外大学生との交流、③についてはフリーインタラクティブやフォーラム等、大学生や社会人との交流による意識の向上によるものと思われる。

○外向き志向の項目については、No.29はポイントの上昇が見られたものの、No.27及び28の項目はややポイントが下がる結果となった。3項目を合わせたポイントは事前、事後ともに3.67であった。オンライン開催であり、海外大学生との交流の機会を十分に取ることができないことが影響していると思われる。しかしながら、どの項目も元々のポイント(平均値)が高く、特にNo.28および29は3.6ポイント以上と非常に高い数値となっているとともに、外向き志向の回答割合は約92%であり、外向き志向意識が高いことが分かる。

### (2) 参加者の感想から

- オンラインだからこそ、広い分野の方々と出会え、人脈が広がった。発言する機会が多く、自分の考えを自信をもって発言できるようになった。
- 「こうなりたい」という理想像を見付けることができた。
- 他の高校生、大学生と交流してたくさんの刺激を得られ、とても有意義な時間となった。
- 特に自己分析ワークショップでは、普段の高校生活ではあまり時間がなくできない、自分を見つめ直すことができた。
- 海外の大学受験に向けてこれからすべきことがクリアになった。新しいことにチャレンジしよう

うと思えた。

- 社会人や大学生の話を聞き、新しい視点を得ることができた。ウィンタースクールに参加して得られた課題（自分の独自性や自分にしかできないことは何かを今後探していかなければならないということ）に気付くことができた。（課題解決を通して）得られた力を使って、自己主張し、これからのグローバル社会を生き抜きたい。
- 普段話すことのできない社会人や他地域の方と話をすることで、人間関係の輪を広げ、新しい考えや意見を吸収できた。
- （成果発表として学校通信にレポートが掲載されたところ）友人から自分も機会があれば参加したいという意見をもらえた。自分自身も大学生になったらメンターの立場で参加したい。
- 今回の経験を通して、人と交流することは思っていた以上に楽しく、ハードルが低いと気付けた。
- 人と繋がる面白さを実際に肌で感じることができた。
- 志高い友人ができた。頼りになる先輩（大学生）の姿を見ることができ、良い経験になった。
- （今後）様々な価値観や背景をもった人と話したり、ワークショップ、ボランティア等をする機会があれば、積極的に参加したい。
- 英語について、自分だけ置いていかれる気がして怖いと思ったが、結果的に（セミナー等のプログラムを）やり遂げることができた。1歩を踏み出しても大丈夫だという自信が付いた気がした。
- 自分の興味のあることには、ためらわずに取り組んでいきたい。

#### 【成 果】

- 新型コロナウイルス感染対策のため、女川での対面開催から高校生については完全オンライン開催となり、期間も4日間と短縮したにも関わらず、アンケート結果及び参加者の感想からも本事業に対して高い評価を得ることができた。
- 事業実施期間中、参加者は、高校生2~3名、大学生スタッフ2名より構成される“ハウス”と呼ばれる班単位でプログラムに取り組んだ。オンライン開催のため、直接的な交流はできなかったが、多くのプログラムをハウス単位で行うことで、絆を深めることができた。（オンライン交流のメリットを生かし、事業終了後もSNS等でお互いの取組を共有するなど交流することができている。）
- 少人数セミナーでは、海外の大学の学生によるリベラルアーツの講義を英語で行った。多様な学問分野をテーマに行うセミナーの受講を通して、参加者は興味の幅を広げたことに加え、少人数制の講義であるため、会話する機会も増え、高校生は自分の言葉で自分の意見を発信することができた。
- オンライン中継による女川ツアー、地域密着型のワークショップ（Discover Onagawa）を実施することで、開催地女川を肌で感じることができた。また、Discover Onagawaでは、zoomを活用し地元スペインタイル工房を運営している方から震災からの復興の過程についての講話やディスカッションを通して、地域が力を合わせて復興してきた様子を理解することができた。スペインタイルの絵付けキットを各参加者に事前配布し、中継を通して双方向的なワークショップを実施することができ、参加者と地元の方、参加者同士の交流を活性化させることができた。なお、絵付けしたタイルは今後女川町内に展示されることになっており、今回女川に来ることができなかった参加者が将来女川に来たいと思えるきっかけとすることができた。
- 当初、オンラインによる交流ということもあり、自分から積極的に自己開示できない、あるい

は慣れない英語で積極的に話すことができないなど、緊張してチャレンジができない場面が見られたが、自己分析ワークショップ等のプログラムや、多くの大学生や社会人との交流を通じて安心し、チャレンジすることの楽しさを学んでいく様子が見られた。

- 被災地女川町で復興・復旧に取り組む地域の方々や起業家、行政の皆さんと触れ合い、女川にかける熱い想いを感じることで、郷土愛を培うとともに、被災地宮城の復興に少しでも役立とうとする気持ちが芽生えた。
- 閉会式では、高校生一人一人がオンライン画面越しにウィンタースクールで学んだことや、これからどんな大人になっていきたいのか、自分の人生をどのように過ごしていきたいのか自己開示できた。

#### 【課題】

- オンライン開催のため、女川町の様子（特に復興にかける町の人々の熱意や思い）については限定的な関わりしかもつことができず、広く女川町の方々や参加者同士の活発な交流の機会を提供することができなかった。特にオンラインに慣れていない高齢者や交流できる時間が限られる中学生など、参加者と異なる世代との交流の機会をもつことができなかった。
- 新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、海外からの渡航制限のため、いろいろなバックグラウンドをもつ海外大学生との交流することが難しかった。また期間も短縮されたため、英語を使ってコミュニケーションを取る機会も限られる結果となった。
- 事業期間が短縮されたため、オンライン上で交流するプログラム以外のプログラムを実施することができなかった。来年度は女川町の伝統芸能等に触れたり、ローカルで活躍する地元の人たちと交流する機会をより多く設定したい。
- 新型コロナウイルス感染対策のため、学びを共有し合う成果報告会を行うことができなかった。また参加した高校生が所属する高校でのホームルームや学年集会等を生かした報告会も限られ、書面での報告に代えるなど、学びを発信することが難しかった。昨年度のように宮城県青年団連絡協議会が毎年1月に行っている「青年問題研究会」と合同開催した『未来の青年の実践発表「アシタ宣言」』への参加、NPO カタリバ主催の日本各地で行われている、「全国高校生マイプロジェクトアワード」への参加等もできず、事後研修の充実面で課題が残った。